

さざんか

第62号、2006年11月

ついこの間まで半袖姿だったのに、もう厚手の上着まで必要なほどに冷え込んできました。一年の中でも、この時期は特に時間の流れの早さを感じやすいように思います。楽しい夏休みに続く北薩の秋は終わりが早く、なぜかは知りませんが、我先にと競い合うように紅葉し、そして落葉する木々とともに冬を迎えつつあります。紅葉ってふしぎですね。

ところで、2025年には大口市の人口は推測では1万5千人くらいに減るそうです。人口減少社会はすでに将来の話ではなく、現実のものとなりつつあります。時が過ぎ行き、人々が老いて死んでゆくのは仕方がありません。それは自然なことなのですから。しかし、途中で命を失う子供たちがいることは決して自然ではありません。いじめによる自殺報道を聞くたびに心が痛みます。一方で、親による幼児虐待を伴う子殺しも報道されたり、他方で親殺しもあったりするからまったく、わけが分からなくなってきました。親が悪いのか子供が悪いのか、先生が悪いのか。親も悪いし子も悪いし、先生も悪いのか。親と子供と教師の3すくみ状態が続いているようにみえます。若者が自ら選択してしまう死は、日々人のいのちと向き合っている身にはなんともやるせない思いです。子供の自殺や幼児虐待を防ぐ最良の方法は、子供時代に「いのち」の大切さとかけがえのなさを教えることではないでしょうか。

教育基本法の改正も話題になっています。愛国心うんぬんも結構ですが、まずいのちの大切さ、一回性を理解し、相手の立場になってモノを考えたり、想像できる人間を創造してほしいものだと思います。

病院からのお知らせ

- * もうインフルエンザワクチン接種はすまれましたか。まだの方はお早めにごうぞ。
- * 骨密度、測ってみられましたか？ご希望の方はいつでもできますので、各科窓口でお尋ねください。
- * MRI で脳の検査をしてみませんか？目的は脳卒中やボケ（認知症）の予防につながることもあるからです。脳神経外科または神経内科外来にてご相談ください。

自殺はやめて 　いまだにカラーパーソン

最近自殺の記事が目につきます。しばらく前までは、バブル経済崩壊のあと、リストラされて職と収入を失い自殺する中高年が目立っていました。なにしろ、日本は世界に冠たる（こういうことでは望ましくないのですが）自殺大国です。年間 3 万人を超える自殺者がいるのに、つまり交通事故死者の 3 倍以上の人が死んでいるのに、大きな政治問題化しないことが不思議な気がします。伊佐地方で生活している人と同じ人数が毎年自殺していることになります。おどろきます。

中高年で死にゆく人々の中には必ずしも本意ではなく、高利貸し（消費者金融とくに闇金融など）に追い詰められて、死亡保険金を命の代償として（それで借金を払うため）自殺という選択をせざるを得なかった人もいと聞いたりします。

基本的に自殺を禁じているキリスト西欧文化とことなり、わがニッポン国では切腹に代表されるように、必ずしも自殺（自死）は忌み嫌われるものではなく、むしろある種の潔さを示すものとして礼賛さえされてきました。死ねば神様・仏様になれる文化風土ですから、あちこちに神様とともにヒトが祭られています。（菅原道真を祭る大宰府天満宮とか、鹿児島で言うと西郷隆盛の南洲神社などでしょうか）

死人の悪口を言わない・言えない風潮は、ややもすると汚職事件などでトカゲの尻尾切りとして何人もの責任の少ない弱い立場の人を自殺に追いやってきました。（死人に口なし）。戦国時代は多くの部下の命を救うことと引き換えに、代表の武将が首を差し出すこともあったようです。（犠牲的精神の美化）

アホな西洋人は日本人（やベトナムなど含めた東洋の人種）は命を軽視していると非難したりします。ヒトの命を大事にしないと、そもそも人権がしっかりと守られていないとか。それは、かつては第二次世界大戦末期の日本の特攻隊に対しての感想であり、またベトナム戦争のとき、ベトナムがとった人海戦術で不利になった時の彼らの（負け惜しみの）感想でした。実は、彼らもそう思っているせいでもないでしょうが、人の命が大切だといっているそばから、われわれとは異なる規模で、現代では信じられないほどの大量殺人をしたのはアメリカ人でした。（空襲でトウキョウを焼き払ったり、ヒロシマとナガサキに原爆を落としたり、ベトナムに枯葉剤を大量に撒いたり・・・）

もっとも彼らのヒトというのはキリスト教徒でありなおかつ白人である人が「ヒト」である、という制限がついているとすれば、それはそれで筋は通っているのかもしれませんが。

話がそれました。そういう、古くからのニッポン国の自殺に対する寛容な風土が、現代でも世界有数の自殺大国の土壌になっていることは間違いのないことでしょう。

オトナが自らの考え、判断で自殺することは止められないように思います。もちろん、自殺しなくてすむ制度・環境を作っていくことが必要なのは言うまでもありません。

自殺することは気の毒であると同時に、生命を捨てることを代償に、すべてこれでチャラにしてくれ、というのは一方ではまことに無責任極まりないという見方もできます。それはないでしょう。残されたものはどうすれば良いのか。死人の悪口は言えないわ、問題は残ったまままだわという、「残された」ものにとって何とも辛い状況に陥っている話も時々見聞きます。いじめた友人を指名して自殺したケースがありました。いじめられた本人の辛さはまことに察して余りあるものがありますが、いじめたと名指しされた子供たちが今後の彼らの人生のなかで、背負っていかざるを得ない重荷を考えると、必ずしも思慮深くないと想像される子供の自殺はやめてほしいと切に思うのです。どちらも傷つくばかりではないでしょうか。いじめた子も、いじめられた子も。子供はしばしば全体が見えなくなります。目の前の小事が一生を左右する大事に思えることは、みんな経験したことがあるのではないのでしょうか。これさえ、上手く乗り切ればあとはどんなことでも我慢できると思ったり、今度これさえ買ってもらえれば、後はもう一生何もいらぬ、などとごねた記憶ってありませんか。大体、「一生のお願い！」というのは子供の常套句でもありませんよね。

子供たちに、そういう小事を小事と理解させるようなシステムは必要だと思いますが、具体的にはどうしたら良いのでしょうか。具体的な方策としてはせいぜい、(学校と独立した)心理カウンセラーの学校への常時の配置とかそういうことくらいしか思いつきません。根本的には学校における教師の教育力の低下と家庭での親の教育力の低下の双方が問題だと思っっているのですが、それはまた別のところで考えることにしましょう。確かなことのひとつは、子供のいじめを苦にして親そのものや教師自身は自殺はしないということです。自分との関係性において天と地ほどの差があつたにしても、他人の死はあくまでも他人(自分という人間以外)の死であり、自分の死ではない。多くの死は、たとえば毎日何十万人のアフリカの子供たちが飢え死にしている現実には心は痛めても行動は伴わないのが普通だし、そうじゃなければ現実社会は生きていけません。親が死んでもたくましく生きていく子供たちは数多い。

だからこそ、無意味にあるいは無慈悲に失われている命があまたある中で、君の、あなたの命は君だけの、あなただけのものなのです。他人(例え親であっても)の死と自分の死は絶対的に違うのです。命はすべからくあなたたち自身のものです。けども、決して忘れてはならないことがあります。それは子供の命は子供のものであるけれど、それは

あなたたちがオトナになってからの話であり、あなたたちが子供であるあいだは、子供の命は父や母のものでもあるのです。いまはあなたたちだけの命ではないのです、と子供たちに教えて理解してもらうだけの力量がない自分もどかしく感じてなりません。とにかく、子供たちよ、自殺はやめて。オトナになってからは、もうそれは止めようがないかもしれないけれども。死ぬ権利があるのは、オトナだけだよ。君、あなたたちはまだ親に対しての義務、すなわち立派な大人になるという義務を果たしていないのだから。自殺するのなら、大人になってから自殺してください。

悲しいニュースを聞くたびにそう思います。子供たちには生きている限りは、無限（であると考えられる）の可能性と未来があるのですから。

野火の音

山本 フサ

遠き田を一枚二枚手放しぬ半径をせばめ敷く老いの陣

なすすべのなしと^{つかさ}阜の田の神は不作の秋をほほゑんでゐる

親と子供の笑い

宮園辰夫

今日はあまり暑くてランニング 1 枚になっちゃったよ。どうですか、おかあちゃん、この格好は。お、お一。肉体美だね。ほんと？肉体美か。うん、美しいぞ。本当か。うん。一緒に寝てみたいか。さあ・・・、そうね。お父さんに悪いよな。そうか。わかんなきゃいいぢやねのか。でもね。やっぱりババアとはね。なに言うか、若いときがあったんだよ。ハハハ。

存在

いまね、この頃はなんだか、六十過ぎると、男は奥さんを思う気持ちよりも、奥さんが男を思う気持ちの方がどんどん減っているってよ。年を取ると男がゾンザイにされているわけだ。父さんはゾンザイにされているか？うん、ほとんどゾンザイにされているよ。そうか、それはかわいそうだな！それで今日は一人で来たのか。うん。行こうと言っても来ないんだよ。あのババーめ。お父さんはもういくつだ。もう八十だよ。元気でいいよな一。車も運転して来たよ。おいおい、大丈夫かい。安全運転してくれよな。人を轢くんぢやねえぞ、わかったか。誰も轢いてなんかいないよ。そんならいいんだ。余計な心配かな。そうでもないよ。それにおっかちゃんは、おとっつあんと寝る事あんのかい。いや、外の男

の方がいいよ。よせよ、それじゃ、おとつあん可哀想だよ。それで別の男の写真を抱いて寝ているよ。馬鹿だな、4回抱いて寝ると、本当に1回別の男と寝た事になるんだぞ。そんな事ないよ。それがあるんだよ、ハハハ。そんならおっばいなんか感じるか。感じない、感じない。そうか、ババアだな。そんなら一緒に寝れないか？2人で大笑い。馬鹿だな、お父さん聞いていたかな・・・ハハハ・・・。たまには馬鹿な話も楽しいよな・・・。そうそう、笑うことはいいことだから。ちえ・・・、ところでお前も嫁さん貰ったら、逃げないようにしっかり押さへておけよ。うん、そうするよ（雑）

息子よりの電話短く終り言葉足りねば受話器置かず

何時の日か吾の安らふ日のありや金策思い眠られずをり

古い仏壇（昔話）

貴島高則 91歳

むかしある寂しい村に貧しい古い家がありました。その家の長男夫婦は、家を継ぎたくないといって、遠くへ出て行ってしまいました。

次男も長男が継がない家を継ぐ責任はないと、古里を捨てて出て行ってしまいました。残ったのは三男の三介と妻のお竹でした。この家には年老いた母がいました。三介は、私がこの家を継いで、祖母の面倒をみようやさしい妻のお竹と共に老母をねんごろにいたわって面倒をみました。老母は大層喜んで、ありがたがると、お竹は三介さんを生んで育てて下さった大切なお方ですもの、と答えていました。老母はだんだんに体に故障がおきて、とうとう寝たきりになってしまいました。お竹はかいがいしく手を尽くし、おむつの取替えにも必ず温めて当ててあげました。それを三介の小さい子が見て出来ないながら、手伝ったり祖母にやさしくしてやるのでした。

祖母はとても喜んで「私ほど幸せ者はいない」と楽しそうな笑顔をしたままあの世へ旅立ってゆきました。祖母が亡くなってから幾日がたったある夜、三介の枕元へお先祖さまが昔の姿のままで現れました。そして三介に向かって「私は三介のようなよい子孫ができてうれしい。仏壇に小判が沢山入れてあるからお前の役に立てたらよい」と言って消えました。不思議に思って三介夫婦が古い仏壇の中を調べると二重底になっていた仏壇の中に山吹色の小判が詰まっていた。三介の子供たちは思いやりの深い、とても親孝行の子に育ったということです。

さつま狂句

きんかん

水^みじ浸^うかつ大^う水の難儀な後始末

改革改革^{ひん}ち^ん貧^{じゃ}乏^ご者は苦^いめら^じつつ

俳句

西屋敷 喜美子

廃屋の 日輪うすき 草紅葉

立冬や 穏やかな日の 一軒屋

一遍上人

すてやらでこころと世をば歎きけり 野にも山にも住まれける身を

編集後記

ああ、もうすぐ今年も終わりそうですね。なんか、時間が停まってくれないでしょうか。もう年は取りたくないや。いいことがあっても、悪いことばかりでも、心弾んでも、落ち込んでも、何をしても容赦なく時間で過ぎていきますよね。毎日一歩、一歩死に向かって時間を削っていつているようなものですが、ここは、悲観的ならず、パッといきたいものだと考えるのですが、若い時と違って中年、いやもう初老かなあ、になるとなかなか希望とか意欲が湧いてこないのは、これもまた自然の摂理なんのでしょうか。いやいや、それじゃだめですね。自然の摂理などと知ったかぶりはやめて、一日一日、元気に生きていくことにしましょう！希望こそが生命力の源なのです。

発行所：県立北薩病院さざんか編集局